松江市文化財調査報告書　第58集

文化財愛護
シンボルマーク

舟津横穴群発掘調査報告書

1995年2月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は平成6年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した平成6年度復旧治山事業にかかる舟津横穴群発掘調査の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は島根県松江農林振興センターから松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3．調査の組織は下記のとおりである。

依頼者　島根県松江市農林振興センター
　　所　　長　　平林　晃
主体者　松江市教育委員会
事務局　教　育　長　　諏訪　秀富
　　生涯学習部長　　中西　宏次
　　文化課長　　中林　俊
　　文化財係長　　岡崎雄二郎
実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課
　　理　事　長　　大塚　雄史
　　事務局長　　佐藤千代光
　　調査係長　　中尾　秀信
調査者　調査担当者　　江川　幸子
　　調査補助員　　宮本亜希子
作業員　福井和夫・福井速雄・福井登志子・福井房代

4．調査の実施にあたっては、次の方々の指導（協力）を受けた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

島根県教育庁文化課　広江耕二
土地所有者　福井繁一・福井昇・福井寿子
カナツ技建工業株式会社松江工事事務所　所長　樋野隆三・平野昌明

5．出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

6．出土人骨については、鳥取大学医学部法医学教室　井上晃孝先生に鑑定を依頼して原稿をいただいた。

7．遺物の実測及び写真撮影、執筆・編集は江川がおこなった。

8．挿図の浄書は宮本がおこなった。

9．拓本は荻野哲二（松江市教育委員会）の協力を得た。

目　　次

Ⅰ．位置と環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 2

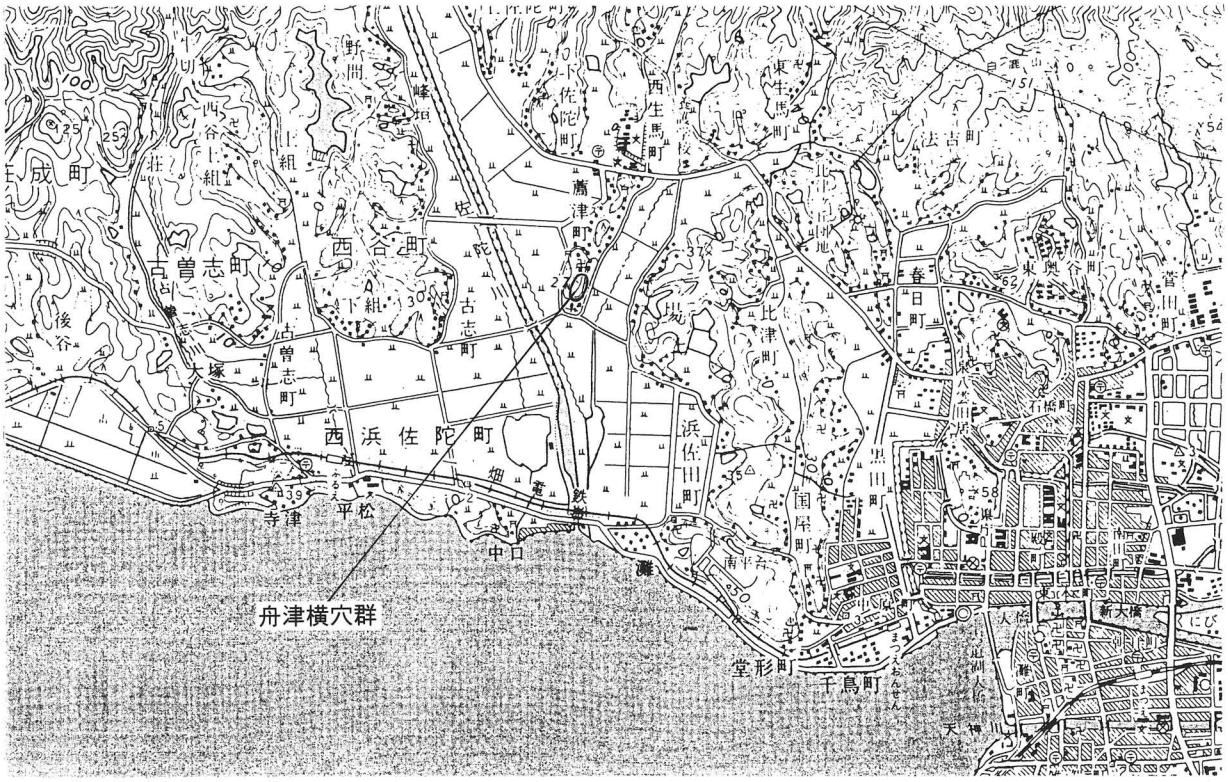
Ⅲ．調査の概要 …… 3

- 1号穴 …… 4
- 2号穴 …… 6
- 3号穴 …… 7
- 4号穴 …… 10
- 5号穴 …… 12

Ⅳ．小　結 …… 14

Ⅴ．舟津横穴群出土人骨について（井上晃孝） …… 15

図版



第1図　舟津横穴群位置図　（縮尺　1／25,000・上方が磁北）

Ⅰ．位 置 と 環 境

舟津横穴群は島根県松江市薦津町801番地を中心とする急傾斜地に所在する。薦津町はＪＲ松江駅から北西方向に直線距離で約４、５㎞離れた田園地帯に位置し、横穴群は北方の北山山塊から細長く派生した丘陵南端東側の比較的低いレベルに位置している。

薦津町一帯に広がる低地は『出雲国風土記』に記載されている佐太水海の一部にあたり、現在の水田は天保年間を中心とする近世に、裕福な商人らによってさかんにおこなわれた干陸事業によって造られたものである。舟津横穴群周辺の田圃が造られた正確な時期の記録はないが、元薦津村有の新田であった[1]という記録が残されている事から、近世の比較的早い時期に田地化されたのではないかと推察される。地元の人の話では、横穴周辺の田を少し深く掘ると今でも厚い藻類の堆積土が出てくるそうである[2]。舟津横穴群は現在では東に田園を臨んでいるが、造営当時は周囲を水海に囲まれた環境にあったと想像される。また、薦津町801番地周辺は字名を船津と称しており、その地名から推察すると干陸される以前は船着き場として利用されていたと考えられるが、記録口碑ともになく、その利用開始時期、規模、性格については不明である。ただ、古くから人々の往来が続いていたことだけは確かのようである。

舟津横穴墓群については、大正６年に初刊された『生馬村誌』[1]に

「古穴　大字薦津字船津八百一番地福井好次郎所有山林ノ東南崖ニ在リ。元埋没シテ人ニ知ラレザリシモ、明治四十四年ノ春発見セラレタリ。入口幅高サ共ニ二尺五寸位ノ穴ニシテ、西微北ニ向ッテ進ムコト約一間ニシテ穴ノ奥部ニ達ス、奥部ハ約方一間、高サ約四尺、底部ハ平坦ニシテ上方ハ円キ窮隆状ヲ形成ス、発見ノ当時奥部ニテ粗製ノ陶器（釉薬ナキ鼠色ニシテ篦目布目アリ）二箇ヲ発掘ス、一ハ高サ七八寸ノ甕ニシテ、一ハ径六寸、深サ一寸余ノ皿状ヲナセリ。他ニ何物ヲ得ズ。入口穴ノ最外端ヲ方三尺許リノ石ヲ以テ塞キタルヨリ推測スレバ、往古ノ古墳ナランカ。」

と記載されており、明治44年に１穴が開口していたことが知られている。その１穴については、現在の土地所有者の１人である福井繁一氏が幼少の頃（昭和10年前後）横穴の中に入って遊んでおられたことを記憶しておられ、福井氏は「内部に灰色をした素焼きの土器があった」ことも覚えておられるが、その行方については残念ながら定かでない。この横穴は昭和37年の水害で流失してしまった[3]。

周辺の遺跡については、かつての佐太水海の水際付近・低丘陵上および丘陵斜面に各時代の遺跡が多数確認されている。その詳細については「松江市遺跡地図」[4]に詳しく記載されているのでそちらを参照していただきたい。

註１）「生馬村誌」（大正六年初刊）復刻版　生馬文芸会　昭和五五年二月

註２）福井和夫氏談より

註３）「生馬のさと」　山根貞之助　昭和50年６月

註４）「松江市遺跡地図」　松江市教育委員会　1991年２月

Ⅱ．調査に至る経緯

舟津横穴群が立地する傾斜地は、急勾配のうえ地山が非常に目の細かい軟砂岩質であるために多量の雨で土砂崩れが起こりやすく、これまでもたびたび小規模な崖崩れを繰り返してきた。実際、舟津横穴群がつくられた斜面の裾部分は一部人為的なカットもみられるが、ほとんど全面において自然崩落を起こしている。そのような場所であるにもかかわらず、崖の東側には２ｍも離れない場所に民家が建っており非常に危険な状態が続いていた。そこで島根県は「平成６年度復旧治山事業」として崖の法面を緩傾斜にし、コンクリート擁壁にする工事を実施することにした。その工事中に、工事予定範囲の北側斜面において２カ所で横穴墓が開口したが、民家の安全をはかるために、またそれ以上法面を削らないといった理由からコンクリート擁壁工事を続行し、横穴墓部分のみを窓状に残して工事を完了した。２カ所の横穴墓については保存措置がとられることになった。

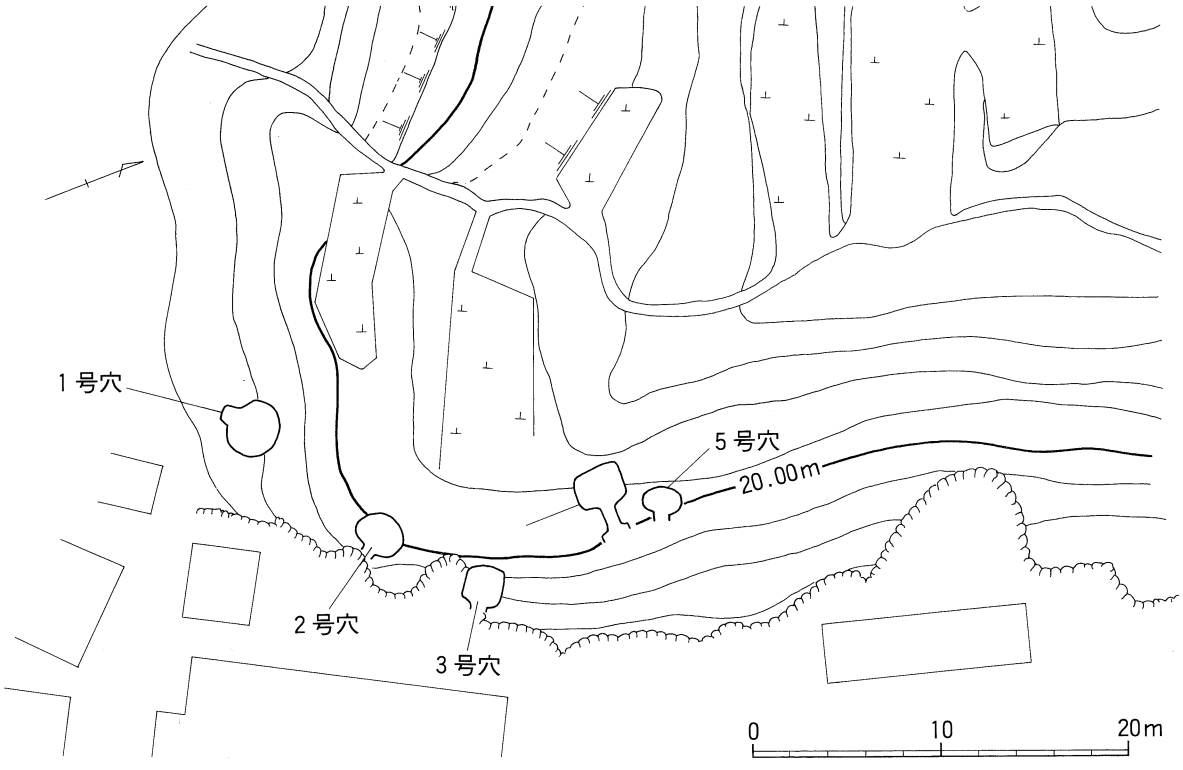
次に南側半分の隣接斜面の工事が開始された。地形から判断しても横穴墓が埋もれている可能性が高いと思われたが、民家の安全を第一に考えて、横穴墓を確認次第すぐに工事をストップすることを条件に重機を利用しての工事を進行させた。そうしたところ、周知の１穴（１号穴）のほかに４穴が開口した。北側斜面の２穴と違い、南側斜面の５穴については工事の安全上、地山をさらに奥まで削り取る必要があり、保存は困難と判断され、発掘調査が必要となった。民家と崖との間には厚い土止めの工事用鉄板が据えてあり、さしあたっての民家の安全が確保されたため、工事を一旦中止して早急に発掘調査を実施するはこびとなった。

Ⅲ. 調 査 の 概 要

工事にかかる測量中に発見された1穴（1号穴）と、重機で掘削工事中に発見された4穴（2～5号穴）について緊急発掘調査を実施することになった。調査の便宜上、南から1、2、3、4、5号穴と呼称し（第2図）、民家のある方向へ一番張り出している3号穴、崩落の危険性が高い2号穴と調査を急ぎ、順次1、4、5号穴と調査をおこなうことにした。

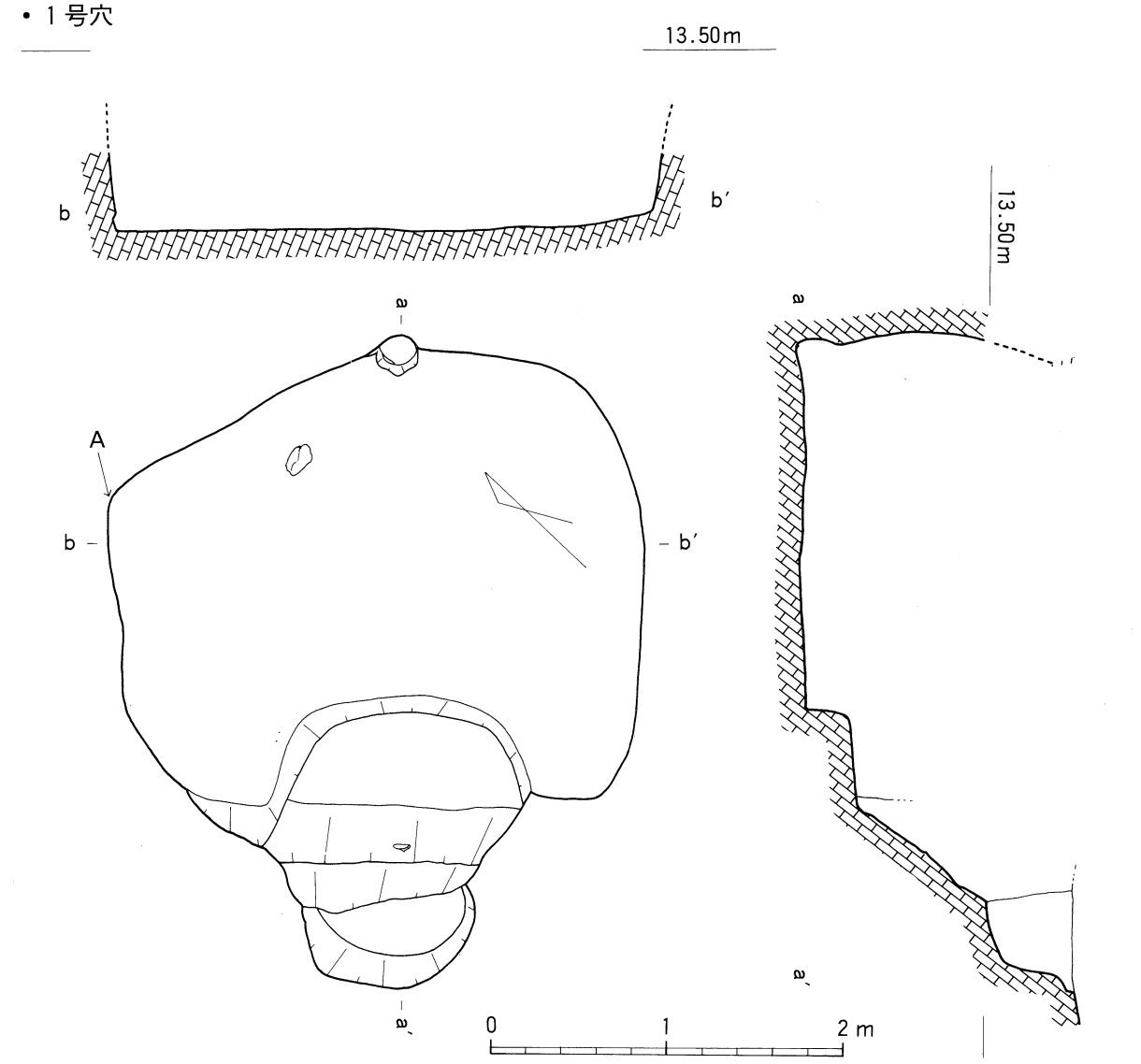
1994年10月3日、発掘に必要な器材を搬入し、午後から3号穴内流入土の除去作業を開始した。土量は多かったが、狭い範囲内でかつ下層では慎重な作業が要求される遺跡の性格上、調査員と調査補助員の2名でこれにあたった。10月7日午前中に3号穴の調査を終了し、午後からは2号穴の調査に入った。2号穴の入口は非常に狭く、内部も1人が作業をするのがやっとであり、床面レベルが入口より約1.1m下がっていたために流入土をかき出す作業が遅々として進まなかった。10月17日、2号穴の調査を終了し、10月18日より1号穴の調査に入った。1号穴は周辺から崩落した大量の土砂の除去に時間がかかると思われ、かつ天井が落ちており複数の作業員が入れる状態であったため、4人の作業員でこれにあたってもらうことにし、調査員は並行して4号穴の埋土除去作業にとりかかった。11月2日、1号穴の調査を終了した。4・5号穴は非常に足場が悪かったため、危険を回避するための昇降用階段を取り付けた後、4号穴・5号穴と再び調査員と調査補助員の2名体制にもどり発掘調査をおこなった。11月28日、実働23日間をついやして総面積約35㎡（平面積）を調査して舟津横穴群にかかる現地調査を終了した。

以下、各穴ごとに調査結果を記していきたい。

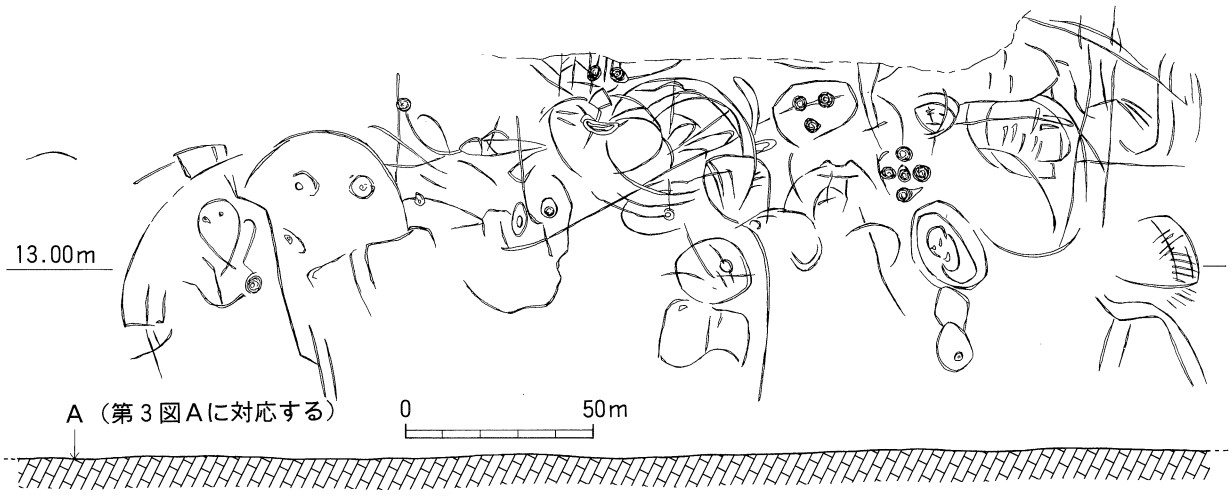


第2図　舟津横穴群横穴配置図

• 1号穴



第3図　1号穴遺構実測図



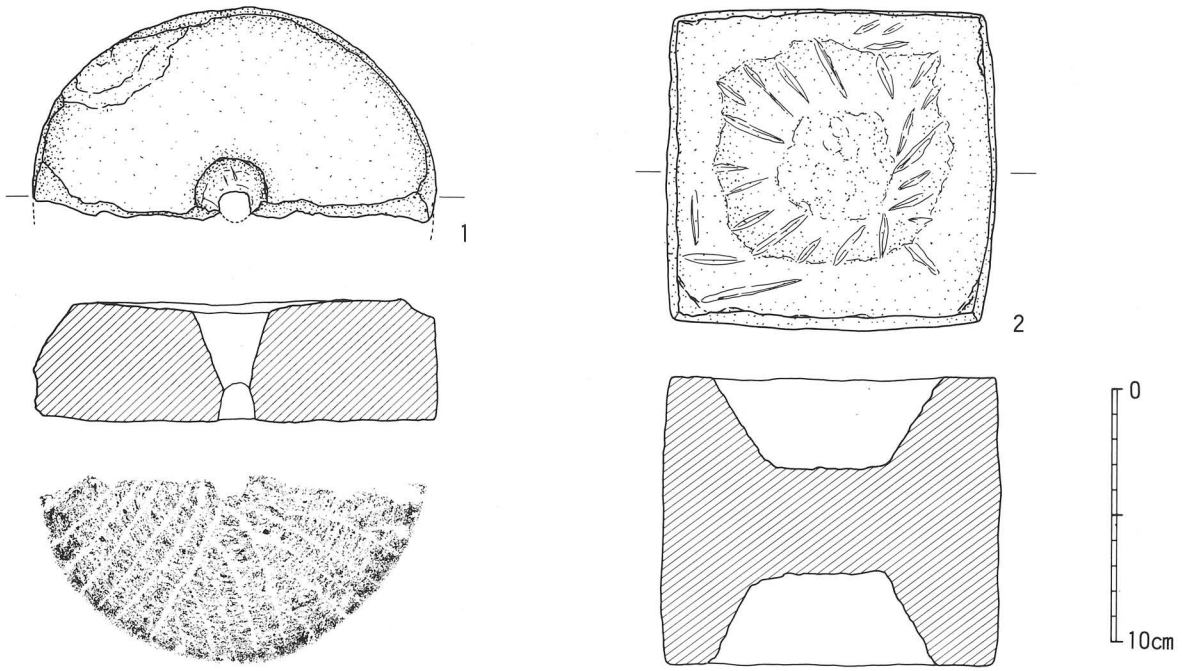
第4図　1号穴壁画実測図（展開図）

1号穴（第3図）は軟砂岩質の斜面に掘られたもので、主軸はN－47.5°－Eにとる。入り口は現在の地表面レベルとさほど変わらない標高約14mの地山から、ステップ式に地下の奥室へ通じるように作られたもので、上から50、70、30cmと3段で床面に達している。高低差の著しい中段では小さな足掛けのようなくぼみも観察される。地表から約1.5m下がった標高12.4～12.5mのレベルに不整形な角丸方形の奥室が作られている。階段の下から奥壁まで約2m、最大幅は約3mを測り、床面積は6㎡前後の広さである。奥室の床面は奥のほうが8cm程度低くなっている。排水溝等のはっきりした施設は無いが、奥壁の中央部分にはわずかな凹部が認められる。煤等の付着はなくその性格はわからない。天井は崩落が著しく、また作業の安全面から故意にも落としており、その高さ・形状は不明である。整形は、床面の凹凸が顕著であったが、側壁は比較的滑らかな作りであった。

奥室の奥壁を中心にして側壁にかけては線刻画が描かれていた（第4図）。壁は残りの良いところで床面から1～1.5m上部までしか残っておらず、全てが観察できたわけではないが、奥壁のほぼ中央に虎か猫のような動物、すぐ右隣に人物が描かれている。ほかにも鳥のような形・人物のような形が見えるが、意味を持たないと思われる線も多く、絵全体としてどのような意図を持って描かれたのか、または単なるいたずら描きなのか、現時点では不明である。

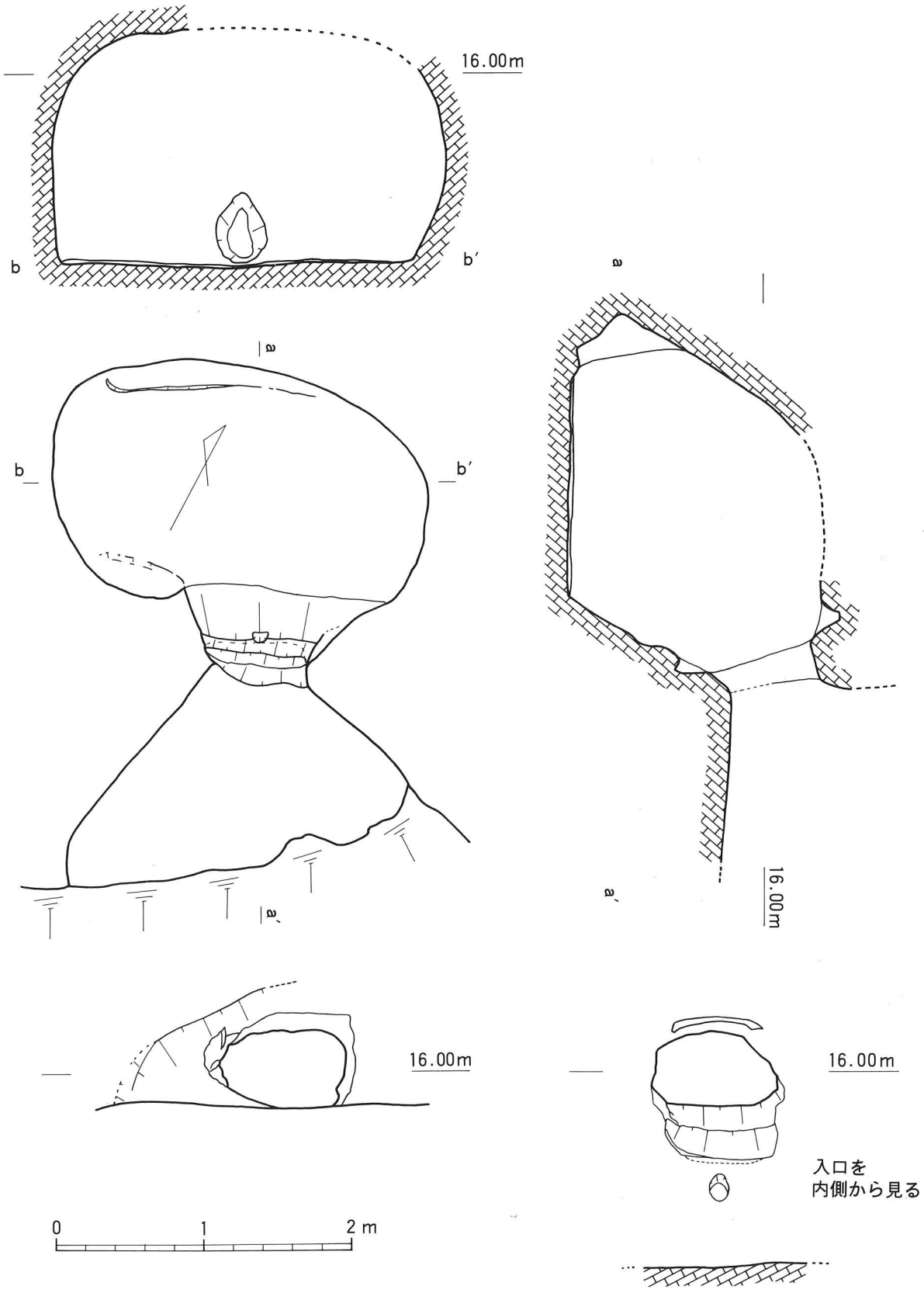
遺構にともなう遺物としては床面より1cm程度浮いたレベルに江戸時代末期～明治時代と考えられる陶器小片1片（きわめて小片であるため図面化していない）が出土したほか、入口付近の埋土中から石臼・性格不明の石製品（第5図）が各1点ずつが出土した。石臼（1）は半分を欠損しているが、直径31.8cm、厚さ9.4cmを測る。昭和初期頃まで使用されたタイプのもので、下面には使用痕が観察される。方形石製品（2）は26.4×25.3×22.8（高さ）cmを測り、対になる2カ所に鑿痕が明瞭に残る深いくぼみが彫られている。用途はわからない。

以上のとおり、1号穴は古代の横穴墓ではなかった。近世に作られた地下式倉庫の類であろうか。



第5図　1号穴出土石製品実測図

• 2号穴



第6図　2号穴遺構実測図

2号穴（第6図）は軟砂岩質の斜面に掘られたもので、主軸はN－29°－Wにとる。入口の前にはハの字形に開く平坦面が作られているが、重機による掘削のため本来の広さは不明である。その平坦面は入口に近づくにしたがってやや高くなっており、レベルは15.70～15.80mを測る。入口は斜面を垂直にカットした後、幅85cm、高さ52cmを測る横に広い不整形な楕円形に穿っている。入口の裏側には、上部に長さ62cm、幅14cmで断面コの字形の15cmの刳り込みを、下部には長さ65cm、幅12cmで断面V字形の8cmの刳り込みを設けている。これは閉塞をする際に平らな板を受けるために造作した施設であると考えられる。

奥室は1号穴同様地下式で、入り口より1.1m下がった標高14.70mに平坦な床面を作っている。奥室へ通じる斜面にはわずかに足掛けのくぼみのようなものがみられるが、実際に中に入ろうとすると入り口が狭い上に1m強も下へ降りるため、衣服は汚れ体勢的にも苦しいものが感じられた。奥室は奥行き1.5m、幅2.55mを測る横に広い不整形な楕円形を呈しており、面積は約3㎡である。天井はドーム状で高さは約1.6mを測る。奥壁の中央部分には意図的なものかどうかはわからないが、1号穴にもみられたような奥に向かう刳り込みが観察できる。周囲に煤等の付着は無く性格は不明である。整形は天井・壁・床とも角張った手斧の刃のような痕跡が顕著で雑な作りである。

遺構に伴う遺物は全く無く、造作・使用の年代は不明であるが、大まかにみて1号穴の小型版といった印象が強く、ほぼ同時期のものではないかと思われる。2号穴も古代の横穴墓ではなく、地下式倉庫の類のようである。

・3号穴

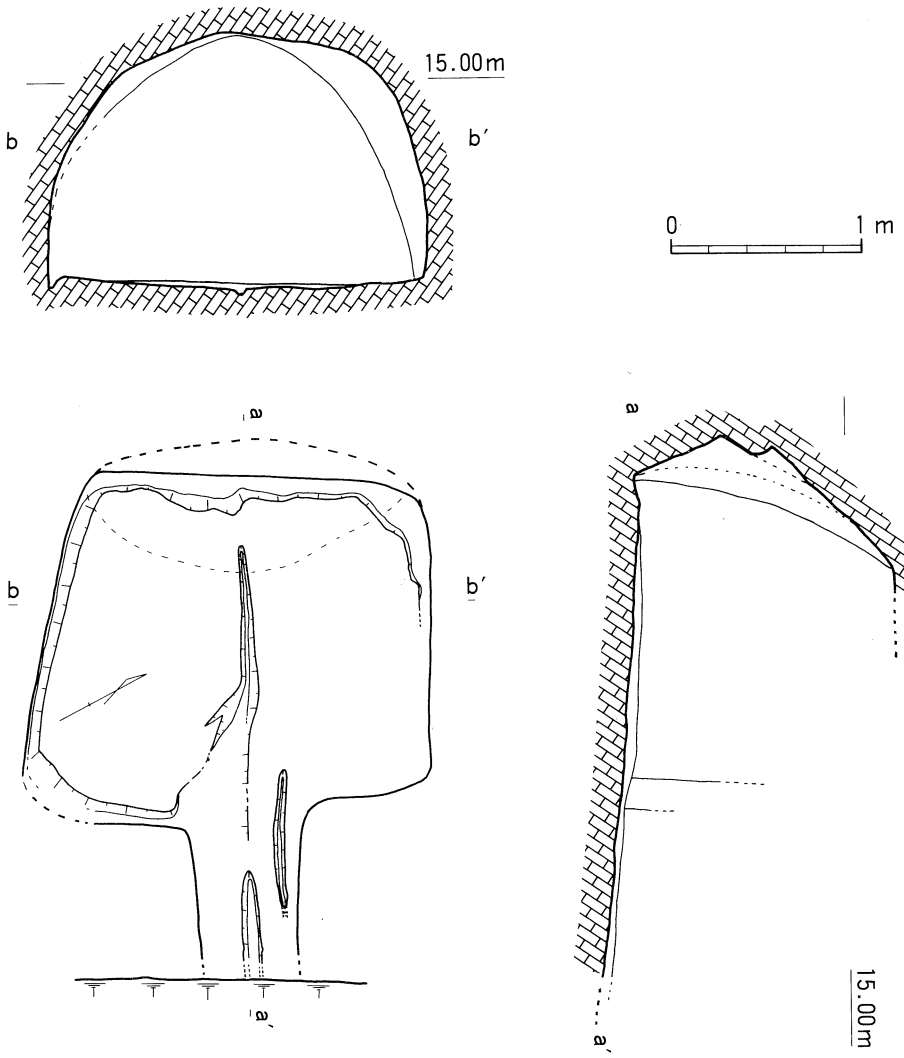
3号穴（第7図）は古代の横穴墓であった。軟砂岩質の斜面に掘られたもので、主軸はN－63°－Wにとる。重機の掘削により、羨門までを完全に破壊されており、閉塞状況や前庭の土層を観察する事はできなかった。玄室天井部もほとんど落ちてしまい、かろうじて羨道の一部と玄室の下方が旧状をとどめている状況であった。

羨道は幅約55cm、残存長80cmを測る。天井の高さは不明である。中央よりやや右側に玄室から続く溝が羨門内を60cm走ったところで消滅し、玄門の手前30cmの位置からはほぼ中央に幅10cm、深さ2～4cmの排水溝が羨門方向へ流れている。玄室は奥行き1.8m、幅2.05mの角丸方形で、床面は標高約13.90mを測る。中央部分では奥壁から約35cm離れた地点より幅4～8cm、深さ3cm前後の排水溝が羨道方向に向かって流れており、玄門の手前約60cmあたりで自然に広がって消滅している。左袖側周囲にも幅7cm前後、深さ6cm前後の溝がめぐらされているが、右袖側周囲には排水溝が認められない。また、左袖側屍床は右袖側より1～4cm程度レベルが高くなっており、一見したところ右袖側は屍床を意識していない作りのようにも思える。左側屍床は長さ1.6m，幅0.9mを測る。右袖側は長さ1.55m、幅0.9mを測る。天井は妻入りを意識した棟線の無いテント形である。床面から天井までの高さは残存する最高点で1.35mである。

遺物としては須恵器の蓋坏2セットと人骨が出土した（第8図）。後世に荒らされたような形跡はなかったが、左袖側屍床の右寄りに2の坏は上向きに、4の坏は下向きに、蓋は1も2も裏返しで中央の溝にかかるような状態で出土した。第9図の1は径2.05cmの釦状つまみがつき、かえりのある蓋

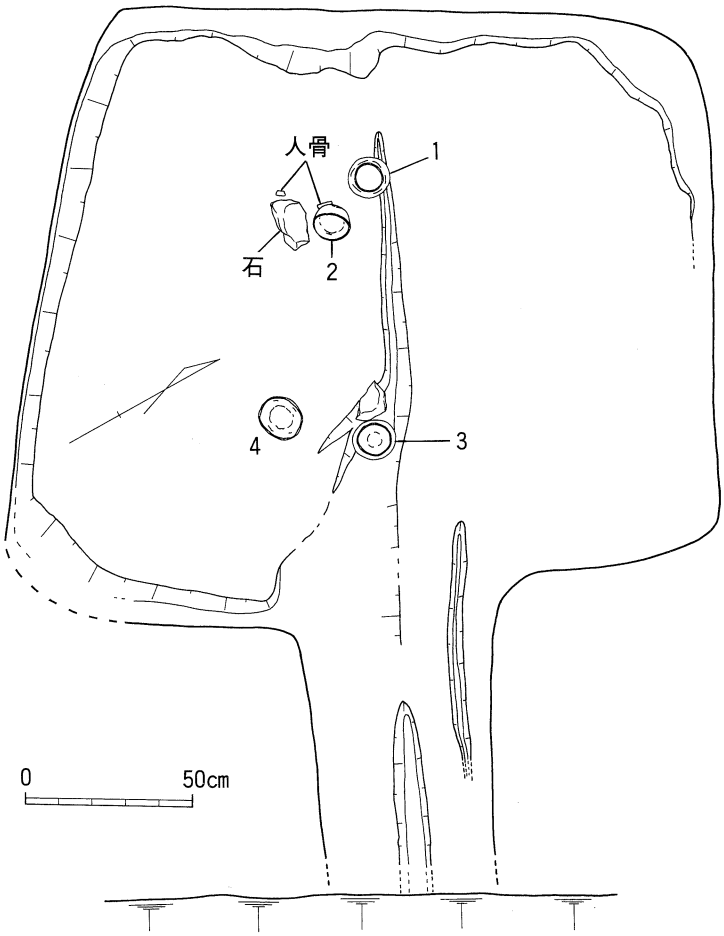
である。口径11.8cm、器高2.2cm、かえり径8.8cmを測る。焼成は良好である。２は１とセットになる坏で口径10.8cm、器高3.9cmを測る。見込み部分にはヘラ記号「×」が描かれている。底部はヘラ切り痕が残る。焼成は良好である。３は径2.2cmの擬宝珠状つまみがつき、かえりのある蓋である。口径12.05cm、器高2.8cm、かえり径9.5cmを測る。焼成は良好だが、器形に焼き歪みがみられる。４は３とセットになる坏である。口径12.4cm、器高3.1cmを測る。口唇部分が少々内側に突出するといった変わった形状を呈している。底部は粗雑なヘラ切り痕が残る。焼成は良好である。以上、個体別に出土須恵器の詳細を羅列してきたが、いずれも７世紀前半の特徴的な小型蓋坏であった。須恵器のみから判断すると、その数の少なさや時期差が認められないことから、３号穴は短期間の利用で終わった可能性が高いと思われる。

もう１つの遺物、人骨については床面に苔が３cmの厚みでびっしりと絡み合って生えていた上、骨質が非常にもろくなっていたために、出土位置を確認する事はほとんどできなかった。ただ、脛骨の位置と歯牙の散乱していたおおよその場所がわかったので、遺体は入り口側に頭部を向けて安置されていたものと推察された。人骨の鑑定は鳥取大学の井上晃孝先生にお願いし、その結果として、歯牙

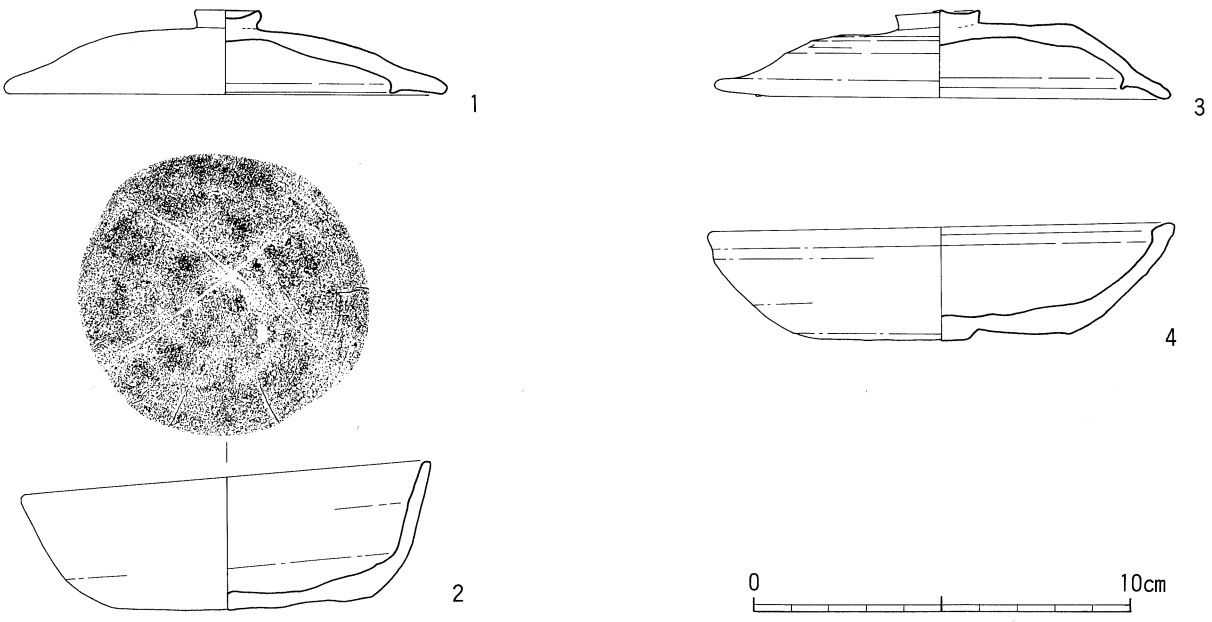


第７図　３号穴遺構実測図

の形態から少なくともこの3号穴内には2人が埋葬されていたとの回答をいただいた。須恵器の出土状況と考えあわせると、同時埋葬かあるいはきわめて短期間の内に追葬がおこなわれたのではないかと思われる。

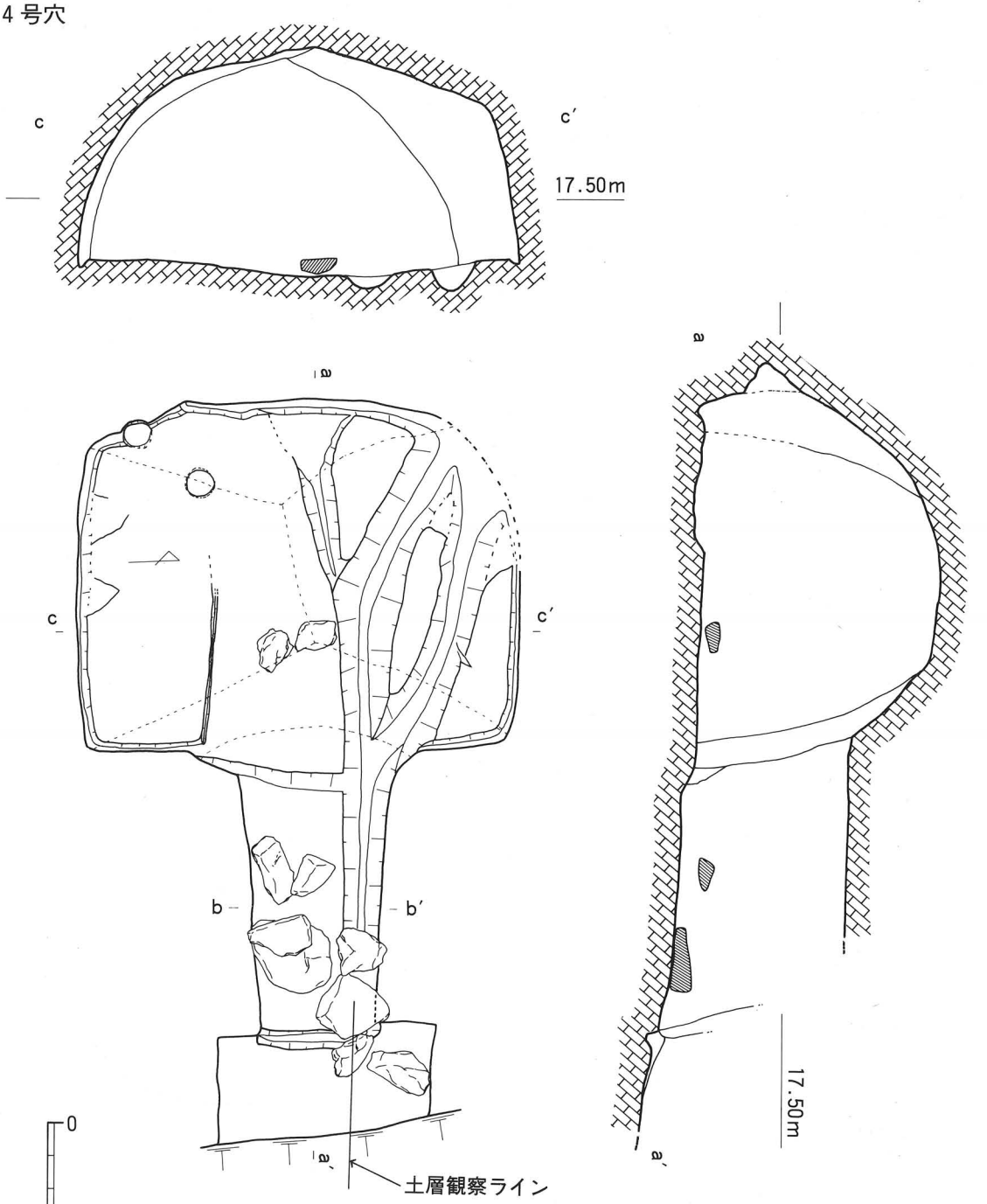


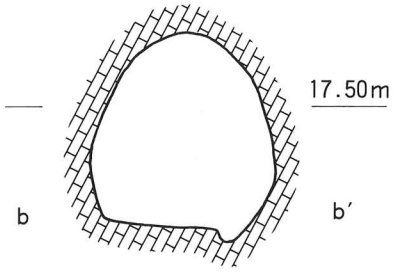
第8図　3号穴遺物出土状況図

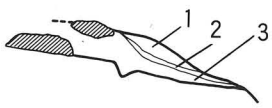


第9図　3号穴出土遺物実測図

• 4号穴







羨門前の土層堆積図

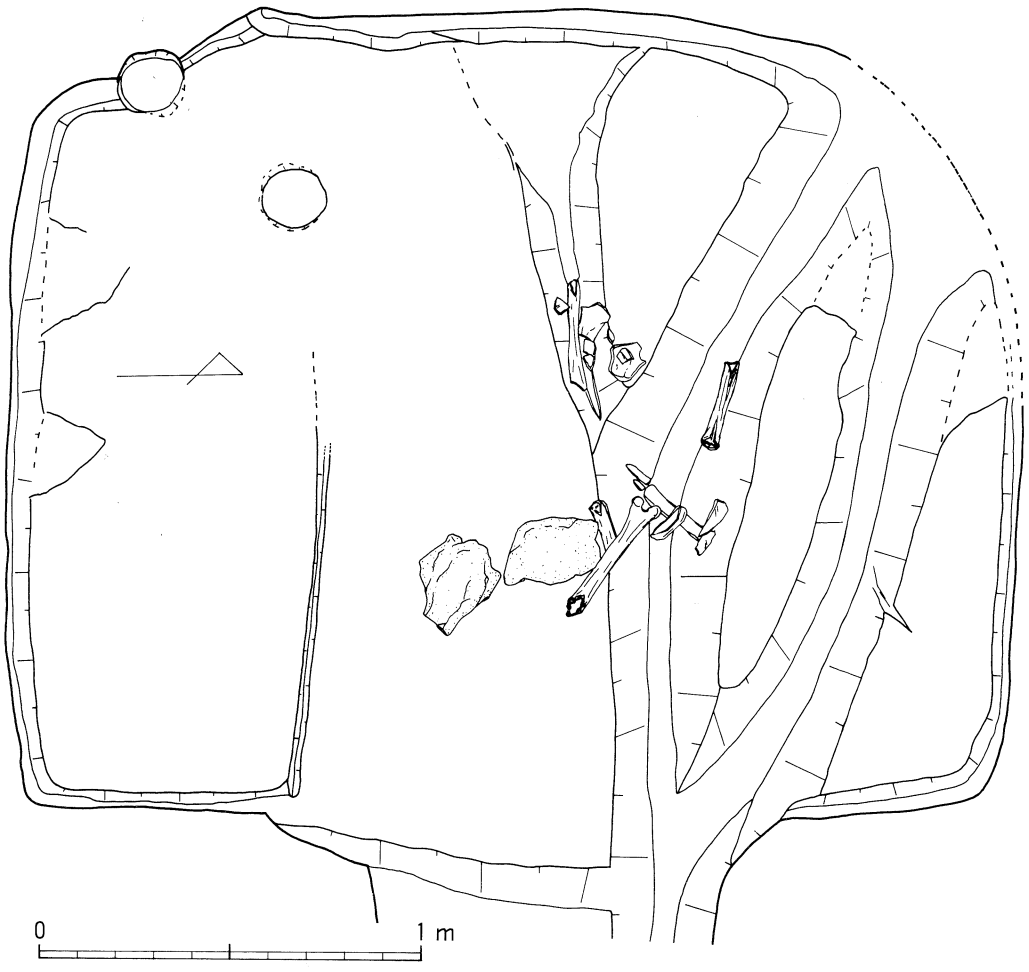
1　地山が風化した褐色砂質土
2　炭を多く含む灰色砂質土
3　炭を少々含む褐色砂質土

第10図　4号穴遺構実測図

4号穴（第10図）は古代の横穴墓であった。軟砂岩質の斜面に掘られたもので、主軸はN－86°－Wにとる。重機の掘削によって前庭部と閉塞石はほとんど削り取られていたが、羨門周辺の下場は残り、それより後ろに位置する羨道・玄室については天井もほぼ残存していた。

前庭から羨門にかけてわずかに残った土層を観察すると（第10図右下）、3層に分けることができ、上から地山が風化した褐色砂質土、炭を多く含む灰色砂質土、炭を少々含む褐色砂質土となっていた。炭片はかなり大きい個体もあり、その量の多さから、墓前祭祀として大量の薪を燃やしたことがうかがわれる。炭の他に遺物は出土しなかった。

前庭の最も奥は幅1.3m、そこへ開口した羨門は幅0.7mで、床面には平板を立てるための溝が幅10cm、長さ75cm、深さ3cmに掘られていた。閉塞には人頭大の石を大量に利用しているが、重機の掘削によってそのほとんどが原位置から動いた状態で確認された。羨道は、長さが約1.5m、幅は玄門に近づくにつれて広くなり、玄門部分で90cmを測る。天井は断面丸く作られ、床面からの高さは1.03mである。玄室は奥行き2.1m、幅2.64mを測る横広の方形である。床面の標高は17.10m前後で、床面積は約5.5㎡である。天井は妻入りのテント形で、床面からの高さは最高点で1.5mを測る。玄室内の側壁・奥壁に沿っては幅6～10cm、深さ2～4cmの排水溝をめぐらしており、左袖側には左側壁から80cm中央寄りに約4cmの段差を設けて周囲より一段高い面をつくり、幅80cm、長さ195cmの屍床を作っ

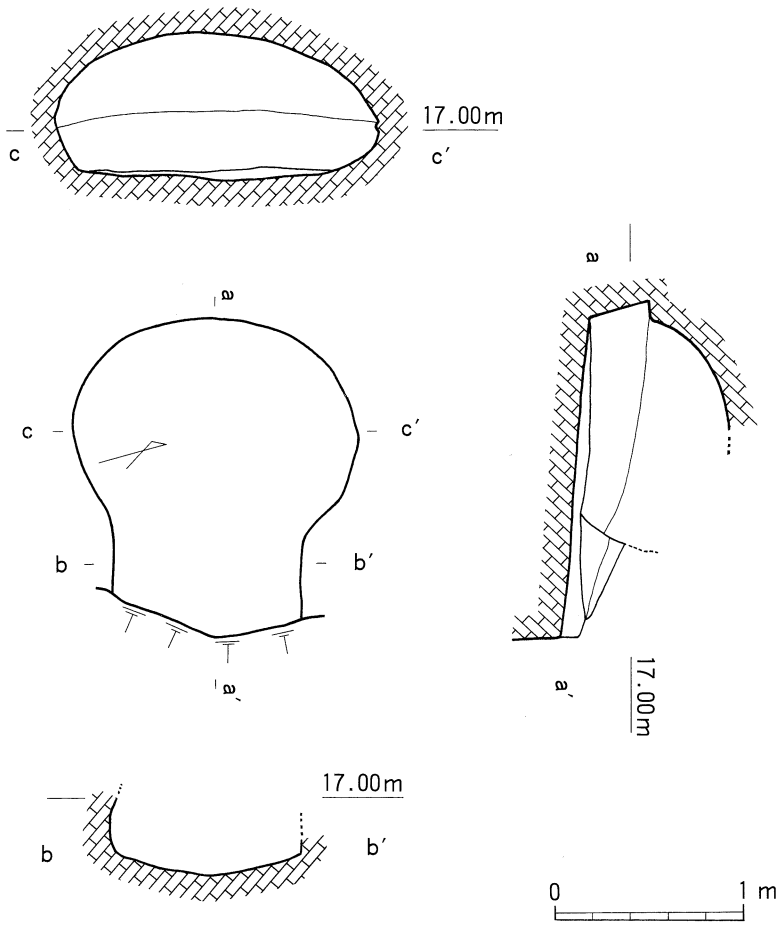


第11図　4号穴人骨出土状況

ている。右袖側周囲にも排水溝がめぐらされていることから屍床が作られていたと思われるが、現在は後世に造作されたと思われる溝によって荒らされている。具体的には、右袖奥の角から幅30cm、深さ13cmの断面U字形の2条の溝が掘られており、玄門付近で合流して1条になって羨道の右側に沿って続き、羨門の20cm手前で終結している。右袖奥角は現在でも降雨があった翌日には水分が滲み出るような場所で、調査期間中いつも湿っているような状態であった。どのような目的で掘られた溝かはわからないが、わき水に関連するものであるかもしれない。玄室ほぼ中央から奥壁に向かうやや細めの溝については、2条の溝とはその形状において違いがみられるため、右袖側屍床を構成するものである可能性が高いと思われる。

遺物は人骨のみが出土した（第11図）。人骨以外の遺物は全く無く、後世すでに人が入っていたことを裏づけているようであった。人骨は大腿骨や頭骨が確認できたが、その配置には秩序がなく、玄室の中央やや右寄りにいわゆる集骨状態で出土した。出土人骨の鑑定は3号穴と同様、井上晃孝先生にお願いし、その結果、4本の大腿骨が確認されて少なくとも2人以上の人物が埋葬されていたことが確認された。考古学的手法で追葬を考察できないことが非常に残念である。

・5号穴



第12図　5号穴遺構実測図

5号穴（第12図）は軟砂岩質の斜面に掘られた横穴で、主軸をN－75°－Wにとる。4号穴のすぐ北隣で、レベルもほぼ等しく、両者の主軸は2mも離れていない。しかし、5号穴は古代の横穴墓ではなかった。地下式ではないにしても1・2号穴のような倉庫の類もしくは倉庫造作中に何らかの理由があって放棄したものではないかと思われる。工具痕の状態から考えて古代横穴墓造営途中である可能性は低い。

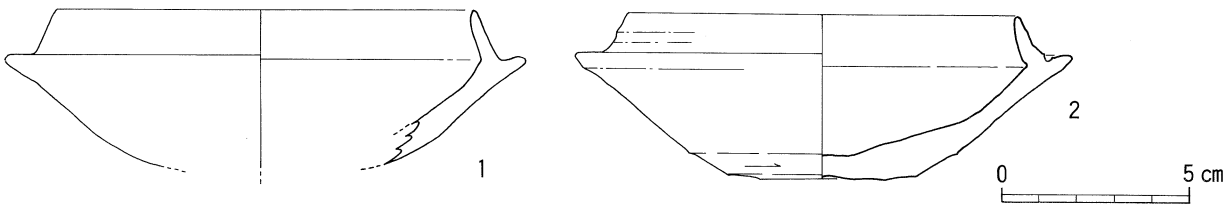
入り口は、幅約1m、高さは重機が削り取っているため不明である。奥室は標高16.75mのレベルに作られ、幅1.5m、奥行きは1m強、天井の高さは約0.8mと非常に小さなものである。床面を含め全体に丸みを帯びており、製作途中の様相が濃いと思われる。

床面から30cm上には地滑りのような段差がみられる。

・遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物としては、1号穴上方の表土中から須恵器の甕片1片と須恵器の坏（第13図1）が出土した。甕片は小さなもので図面化していない。坏は全体の約1/6程度しか残存していないが、復原口径11.2cm、復原受け部径13.8cmを測る、焼成の良いものである。1号穴上方は現在墓地として利用されているが、周囲には横穴墓造営に都合がよさそうな斜面が残っており、まだ遺構が埋もれている可能性は高いと思われる。

重機で削り出した土砂の中からも2片の土器が見つかった。1つは須恵器の坏(2)である。約1/4を欠損するが、欠損部分は工事中にできたと思われる新しい割れ口で、原位置では完形であったかもしれない。口径10.3cm、受け部径13.2cm、器高4.4cmを測る、焼成の良いものである。全体にナデ調整を施し、底には丁寧な回転ヘラ切りの痕がみられる。もう1つは土師器の高坏である。残存部分は坏部の2×3cm程度で法量は一切不明であるが、ヘラ磨きの手法で放射状に暗紋を施しているのが観察される。小片のため図面化はしていない。これらの2つの土器片については、重機が4号穴の閉塞石を掻き出していた場所の周辺に落ちていたため、4号穴に伴う遺物である可能性が高い。



第13図　遺構に伴わない遺物実測図

Ⅳ．小　　結

急傾斜地整備のために重機による工事を急いでいたところ、７カ所の横穴が開口した。北側２穴については保存措置がとられ、南側５穴については今回発掘調査を実施した。その結果、２穴の古代横穴墓と３穴の比較的新しいと考えられる横穴倉庫を確認した。

古代横穴墓については２穴について調査を実施した。いずれも工事途中の発見ということで、残存状況は非常に悪く、閉塞の状況や前庭の土層を観察することはほとんど不可能であった。しかも４号穴についてはすでに玄室内が荒らされた状態であった。

そのような悪い状況にあっても、３号穴は妻入りを意識した棟線のないテント形、４号穴は妻入りのテント形をした天井を確認することができ、４号穴については火を焚く墓前祭祀の跡を確認することができた。また、両穴からは人骨が出土しており、その残存状況は非常に悪いものであったけれども、鳥取大学の井上晃孝先生の鑑定により、３号穴では10代の女性と壮年前期の男性が、４号穴では成人域の女性と30才前後の男性が埋葬されていたことが推定できた。考古資料としてはあまり良好なものとはいえないかもしれないが、保存措置がとられた２穴の横穴墓とともに薦津町の文化財として後世に伝えていきたいものである。

さて、横穴倉庫を調査した例はあまりないが、今回は３穴について調査を実施した。

山斜面に穿つ横穴倉庫（俗称：芋穴）は低いレベルに穿つケースがほとんどであるが、ここでは斜面を少々上がった小高い場所に造作されていた。この薦津町周辺は近世まで内海に面しており、内海が水田に干陸された後も土地が低く、降雨のために床下浸水をしたことがしばしばあったようである。このような環境が横穴倉庫をやや高いレベルに造らざるを得なかった理由かもしれない。

１号穴はかなり大きい地下式横穴倉庫で、壁面には線刻画が描かれていた。２号穴は床面も壁面も工具痕の凹凸が顕著であったのに対し、１号穴の場合は凹凸のある床面に比べて壁面は滑らかに仕上げられており、壁画を描くことを前提に造作されたようでもある。この絵の内容が民俗的な意味を持つものかどうかについては明らかにできなかったので、それは今後の調査・研究に委ねたいと思う。

これら３穴の横穴倉庫が造られ、使用された時期については、残念ながら今回の調査では明らかにすることができなかった。先祖代々の土地所有者で、かつて横穴墓に入って遊んでおられた福井繁一氏もこの横穴倉庫の存在については全くご存じなく、「生馬村誌」等の書物にも記録がない。出土陶器の小片から江戸時代末から明治時代に使用されたであろうことは推察されるが、それ以上のことについては全くわからない。比較的新しい遺構であるはずなのに地域の人の記憶からも忘れ去られ、名実ともに土の下に埋まってしまっている。今回の発掘調査で、地域の民俗史としてこれらの横穴倉庫群の存在が確認できたこと、急傾斜地整備事業の前に具体的な内部構造を観察し、図面に記録できたことは、古代の横穴墓の調査と同様に貴重な調査であったと考えている。

舟津横穴群出土人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

井　上　晃　孝

Ⅰ．はじめに

松江市舟津横穴群の３号穴と４号穴には、人骨が集骨状に若干遺残していた。

両穴の出土人骨は、遺残骨数も少なく、完形の骨もない。

人骨採取は、発掘調査員によってなされ、後日当研究室に搬入されたものについて、検査した。

３号穴と４号穴の被葬者数は、両穴とも男女２体ずつが集骨状に埋葬されていた。

以下出土人骨について、３号穴と４号穴の順に、その概要を報告する。

Ⅱ．３号穴出土人骨

１．遺残骨

３号穴の玄室の中央部に排水溝が作られており、その左右に屍床が作られていた。

しかし、人骨が検出できたのは、左側の屍床のみである。

玄室左側入口寄りに、歯牙（14ヶ）が１箇所に散在、左奥の排水溝側に集骨状に若干の人骨骨片が検出された（図１）。骨の遺残性はきわめて不良である。

出土人骨（No.）	１）上腕骨（左？）	骨体下部の一部
	２）大腿骨（左右不明）	骨体中央部の一部
	３）脛骨（右？）	骨体の一部
	４）寛骨（左右不明）	腸骨片
	５）歯牙	14ヶ

歯牙は屍床面に遊離歯牙として検出した。歯牙の大きさ、咬耗度に差があり、歯冠小、咬耗度０群（１群）と歯冠大、咬耗度１゜群（２群）に大別されることから、２個体の歯牙が混在していた。

１群

５ ４	
６ ５	

２群

７ ６	
８ ７ ６ ５	７ ８

２．推定性別

本横穴出土人骨は、若干で骨片化しており、性別は推定の域を出ない。

検出骨１～４の上腕骨、大腿骨、脛骨、寛骨は、骨の大きさも小さく、脆弱で未熟骨が推定される。歯牙１群と共通点があり、10代の女性骨が推定される。

次に、遺残歯牙のうち、２群の歯牙は、歯冠の大きさからして、男性骨が推定される。以上から、本横穴の被葬者は、男女２体が埋葬されたと推定する。

３．推定年齢

女性骨は骨が未熟で、歯牙（１群）の咬耗が全く認められないことから、年齢は10代位が推定される。

男性骨は遺残歯牙の咬耗度がブロカーの１゜であることから、壮年前期位が推定される。

4．推定身長

本横穴出土の男性骨と女性骨ともに、完形の四肢骨が全くないので、身長は両者とも不詳である。

5．埋葬順序

男性骨の遺残骨は歯牙のみで、頭骨、四肢骨らは全くない。

女性骨は四肢骨片と歯牙のみである。女性骨は未熟骨でありながら、四肢骨片が遺残していることは、おそらく後で埋葬された可能性が高い。

以上から、初葬は男性、女性が追葬されたと推定する。

Ⅲ．4号穴出土人骨

1．遺残骨

玄室中央部から右側にかけて排水溝があり、その周辺に人骨が若干、集骨状に散在していた（図2）。

検出人骨数は8個である。骨の遺残性は不良である。

出土人骨（No.）

1）大腿骨（左）　近位部欠　♂
2）大腿骨（右）　骨体中央部のみ　♂　｝対（？）
3）頭蓋骨　骨片化　♂
　前頭骨の一部、右頬骨の一部、右眼窩上縁部、右側頭骨の錐体部、頭頂骨（孔間部）の一部、遺残歯牙2ヶ（$\underline{6}$」（？），$\overline{7}$」（？））
4）脛　骨（左）　骨体中央部　♂（？）
5）上腕骨（左右不明）　骨体の一部　♀（？）
6）大腿骨（左右不明）　骨体下端部　♀（？）　｝対（？）
7）大腿骨（左右不明）　骨体下端部　♀（？）
8）上腕骨（左右不明）　骨体下部　♂（？）

2．推定性別

本横穴の出土人骨は若干であるが、骨の大きさ、骨質の程度に2種類が混在していた。出土人骨のNo.1、2は左右の大腿骨（対？）、3の頭蓋骨片、8の左右不明の上腕骨は比較的大きく、頑健であることから、男性骨が推定される。

No.5の左右不明の上腕骨、6、7の2ヶの大腿骨（対？）は比較的細く、きゃしゃであることから、女性骨と推定される。

3．推定年齢

男性骨は成人域で、遺残頭骨の縫合の程度と歯牙の咬耗の程度から、壮年（30才前後）位と推定される。

女性骨は、上腕骨、大腿骨が遺残していたが、大きさからして成人域であるが、それ以上は不明である。

4．推定身長

本横穴出土の男性骨と女性骨ともに、完形の四肢骨が全くないので、身長は両者ともに不詳である。

5．埋葬順序

女性骨は、遺残骨数も少なく、その上骨質が脆弱で一見して、男性骨に比して陳旧骨である。しかるに、男性骨の遺残骨数は女性骨より多く、頭骨、大腿骨とも比較的頑健であることから、女性骨よりも新しい骨であると推定する。

以上の出土状況からして、初葬は女性、追葬は男性と推定される。

Ⅳ．考　察

舟津横穴群の3号穴には男女2体が埋葬され、埋葬順序はおそらく、初葬は男性、追葬は女性と推定する。

4号穴は、3号穴と同様に男女2体が埋葬されていたが、初葬は女性、追葬が男性と推定する。

追葬の場合、最終被葬者の遺骨は、後世の攪乱がない限り、骨格順配列で遺残するのが本来の姿態である[1)2)]。

しかし、本横穴群の3号穴と4号穴ともに、男女2体の人骨が集骨状に遺残していたことは、後世の攪乱が推察される。

その攪乱が、後世の祭祀の際、集骨状に集められたか、あるいは盗掘等によるものかが不詳である。

このような事例は比較的多く、最近の事例として、松江市東長江地区の筆ノ尾1号穴[3)]でもみられ、被葬者数6体（♂2、♀4）の人骨が集骨状に遺残していたが、最終埋葬者を特定できなかった。

Ⅴ．まとめ

松江市舟津横穴群の3号穴と4号穴には、人骨が集骨状に若干遺残していた。

3号穴の玄室内には、人骨若干と歯牙が2個体分混在しており、被葬者数は男女2体であった。内訳は、女性の推定年齢は10代位、身長は不詳である。男性の推定年齢は壮年前期位、身長は不詳である。埋葬順序はおそらく、初葬は男性、女性が追葬されたと推定する。

4号穴の玄室内には、男性骨と女性骨の2体が集骨状に遺残していた。男性の推定年齢は壮年期（30才前後）位、身長不詳である。女性の推定年齢は成人域であるが、それ以上は不詳、身長不詳である。埋葬順序は、初葬は女性、男性が追葬されたと推定する。

文　献

1）井上晃孝　：　横田町宮ノ峠横穴墓出土人骨について「角・宮ノ峠横穴・柏原遺跡発掘調査報告書」，14～25，1994，横田町教育委員会

2）井上晃孝　：　コフケ横穴出土人骨の概要「島根県埋蔵文化財調査報告書第XⅧ集」，21～26，1992，島根県教育委員会

3）井上晃孝　：　筆ノ尾第1号横穴出土人骨について「筆ノ尾横穴群発掘調査報告書」，39～50，1995，松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団

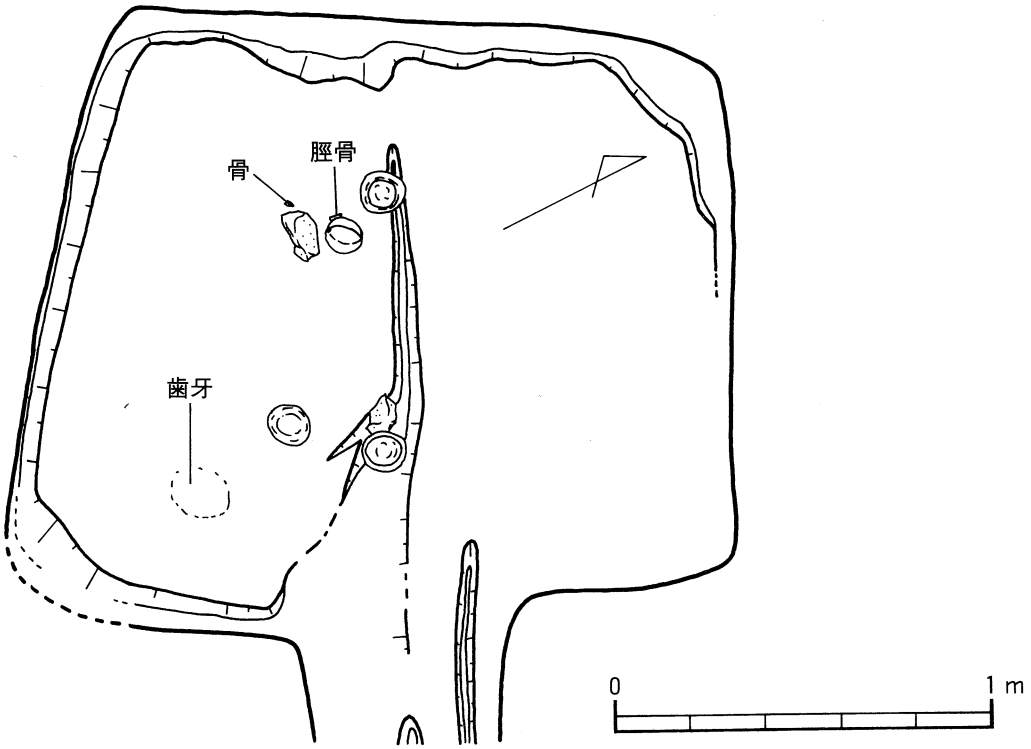


図１　３号穴の遺残人骨

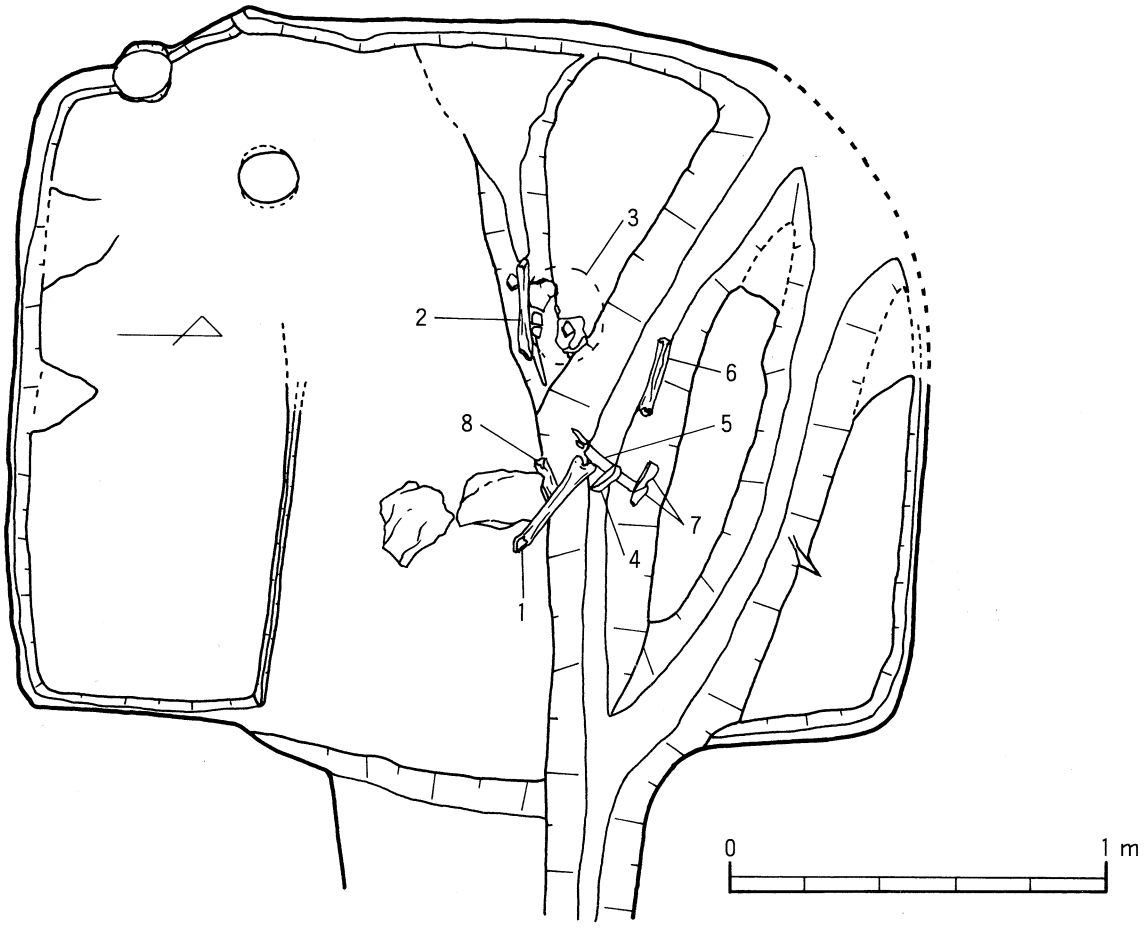


図２　４号穴の遺残人骨

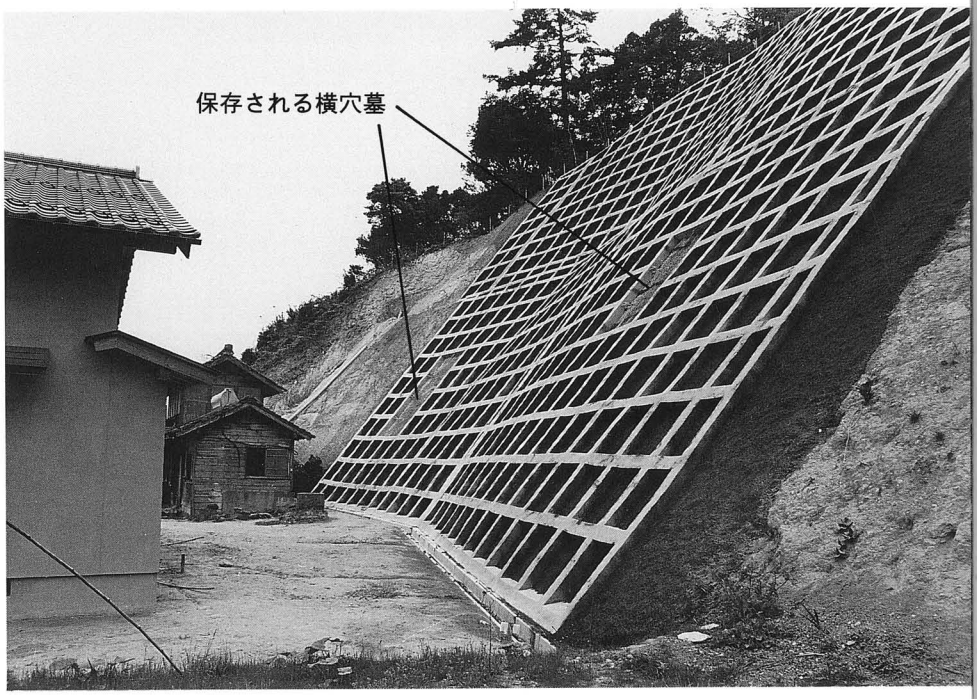
図　　版

図　版　目　次

図版１　上　舟津横穴群遠景
　　中　舟津横穴群近景
　　下　舟津横穴群発見時の状況
図版２　上　１号穴発見時の状況
　　中　１号穴発掘作業風景
　　下　１号穴完掘状況
図版３　上　１号穴出入口の状況
　　中　１号穴完掘状況
　　下　１号穴壁画
図版４　上　２号穴調査前の状況
　　中　２号穴入口検出状況
　　下　２号穴閉塞施設
図版５　上　２号穴奥壁
　　中　２号穴工具痕
　　下　２号穴工具痕
図版６　上　３号穴調査前の状況
　　中　３号穴遺構と遺物検出状況
　　下　３号穴遺物出土状況
図版７　上　３号穴人骨出土状況
　　中　３号穴天井の形状
　　下　３号穴工具痕
図版８　上　４号穴と５号穴の位置関係
　　中　４号穴調査前の状況
　　下　４号穴羨門検出状況
図版９　上　４号穴羨門検出状況
　　中　４号穴玄室内人骨出土状況
　　下　４号穴玄室内人骨出土状況
図版10　上　４号穴右袖側屍床
　　中　４号穴左袖側屍床
　　下　４号穴左袖側に造作された溝
図版11　上　４号穴羨道部工具痕
　　中　５号穴調査前の状況
　　下　５号穴完掘状況
図版12　上　１号穴出土石製品
　　下　３号穴出土須恵器
図版13　上　３号穴出土人骨
　　下　４号穴出土人骨

図版 1

舟津横穴群遠景
（東方より）

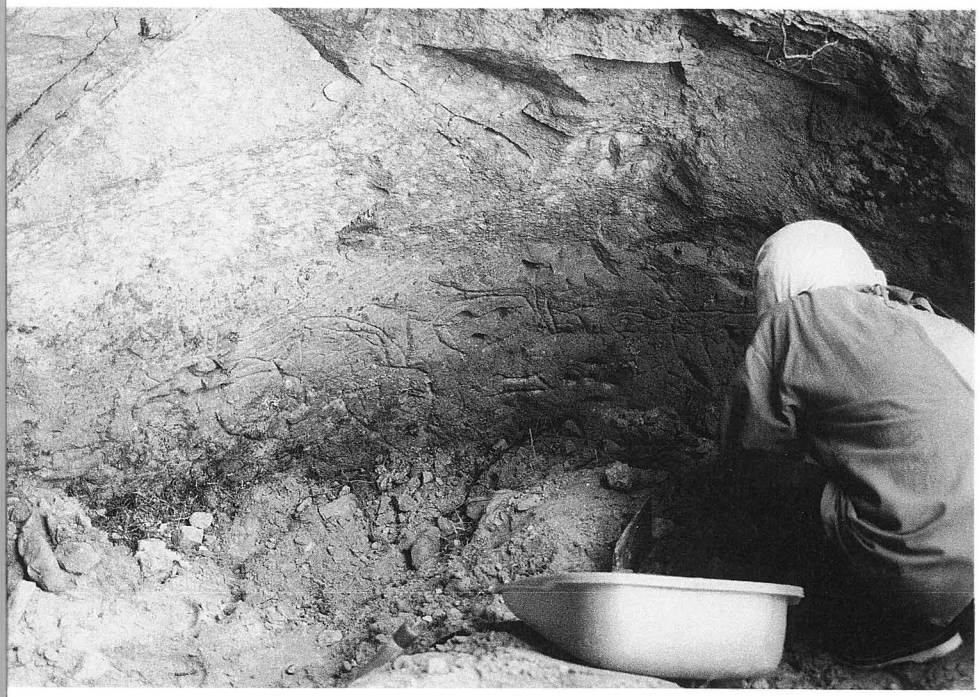


舟津横穴群近景
手前のコンクリート擁壁の中で
四角く地山が露出している場所
は保存措置がとられた横穴墓
（北方より）

舟津横穴群発見時の状況
（シートの下が 4 号穴）

図版 2

1 号穴発掘時の状況
（南西より）



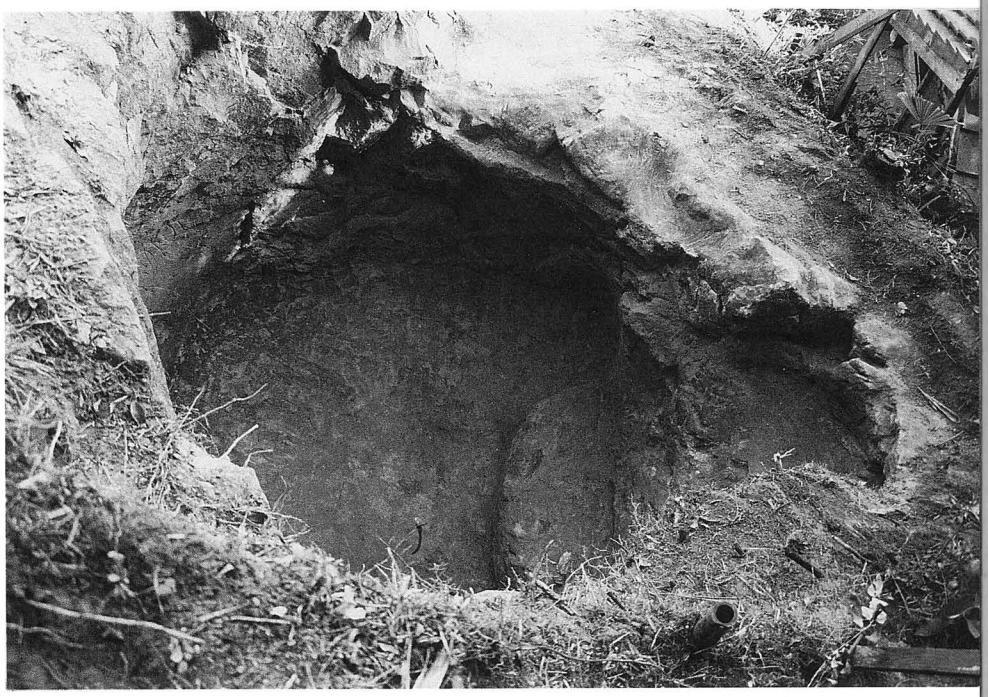
1 号穴発掘作業風景
壁画が見えはじめたところ
（南方より）

1 号穴完掘状況
（南方より）

図版 3

1 号穴出入口の状況
（北方より）

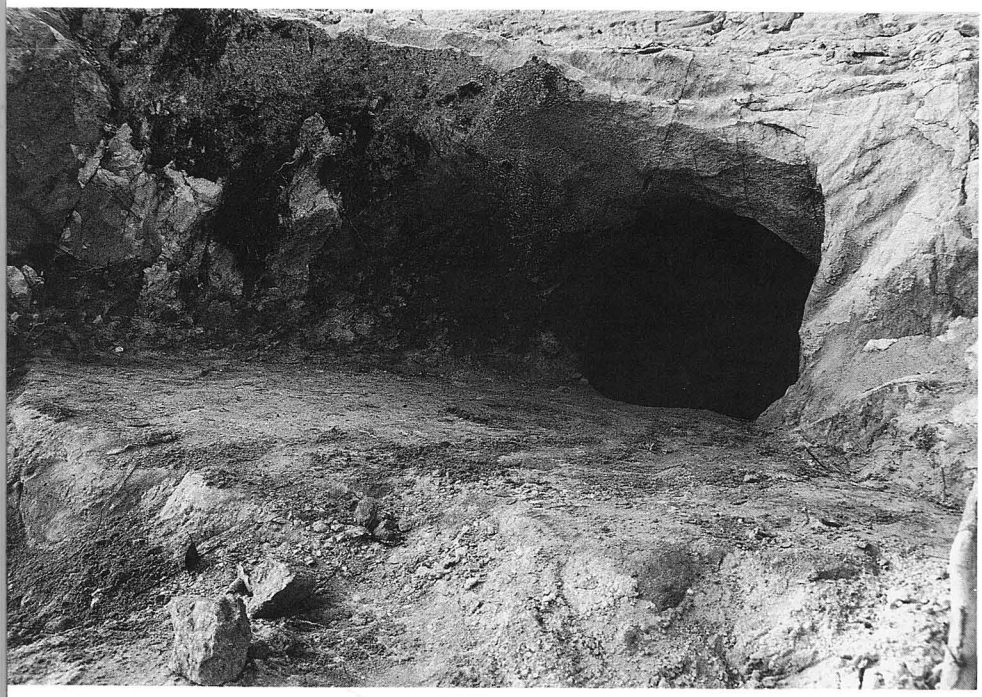
1 号穴完掘状況
（西方より）



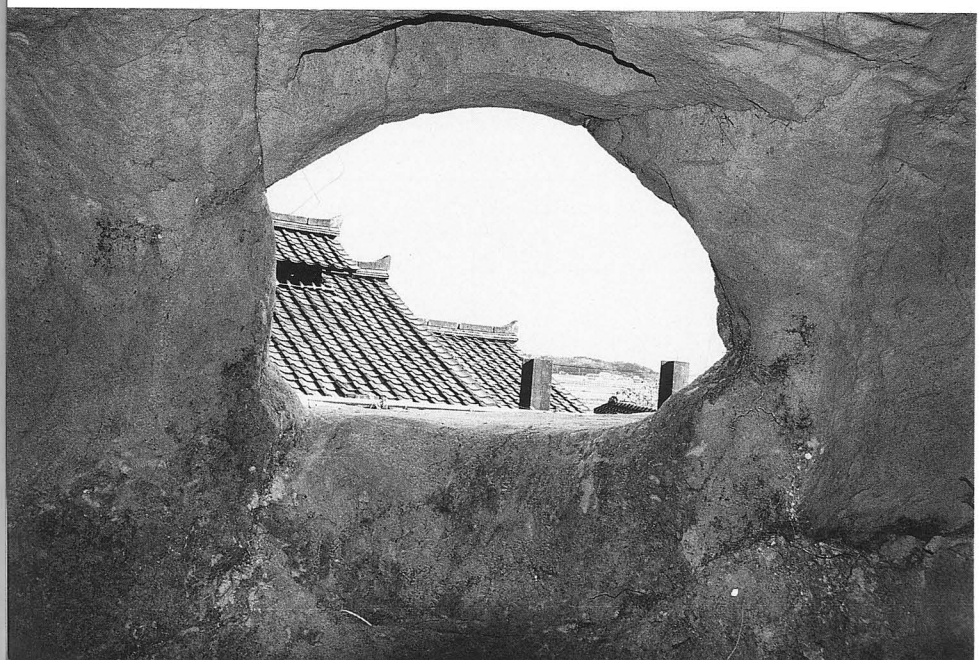
1 号穴壁画
（南方より）

図版 4

2 号穴調査前の状況
（東方より）



2 号穴入口検出状況
（東方より）



2 号穴閉塞施設
（内部より）

図版 5

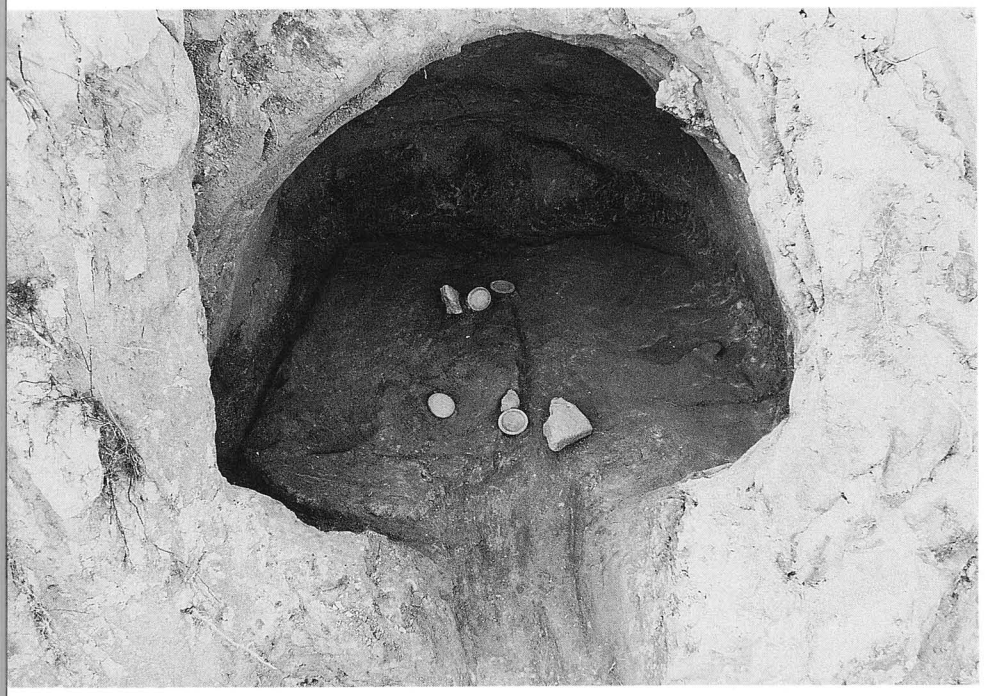
2 号穴奥壁

2 号穴工具痕

2 号穴工具痕

図版 6

3 号穴調査前の状況
（南上方より）



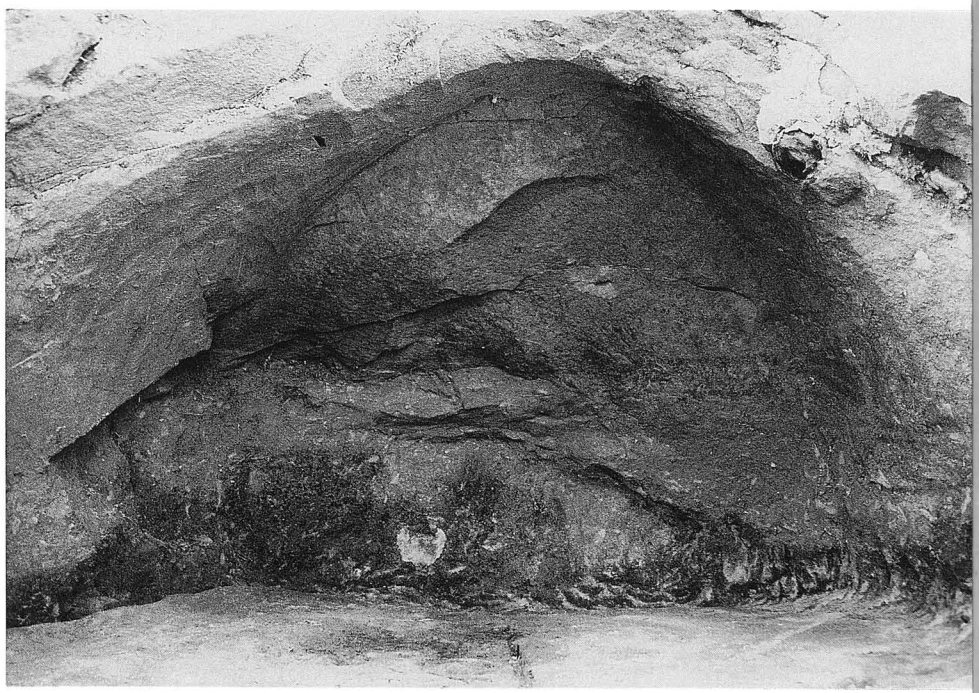
3 号穴遺構と遺物
検出状況
（東方より）

3 号穴遺物出土状況

図版 7

3 号穴人骨出土状況

3 号穴天井の形状

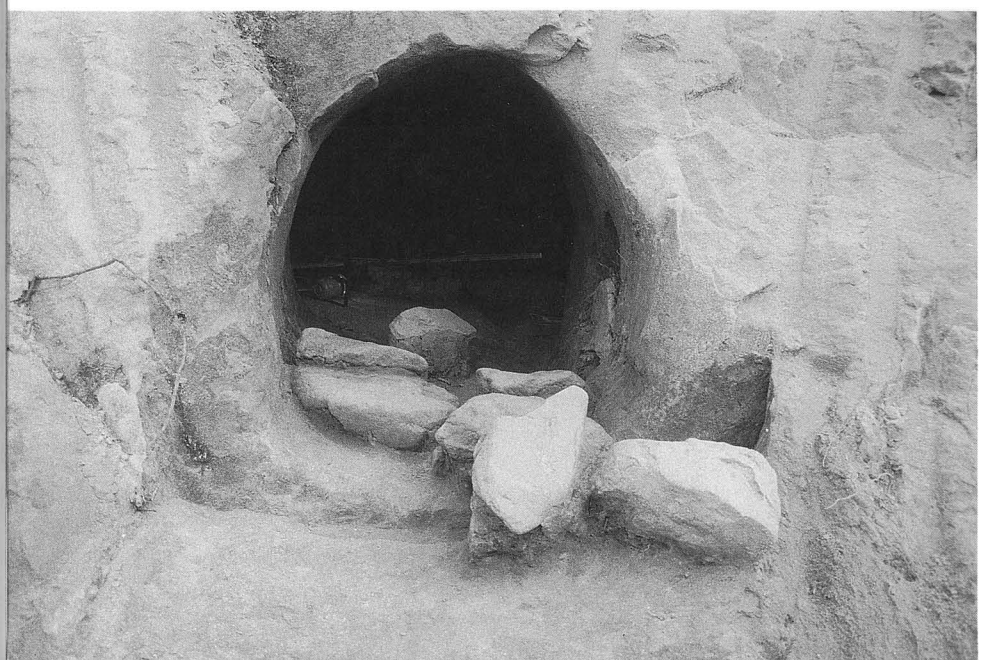


3 号穴工具痕

図版 8

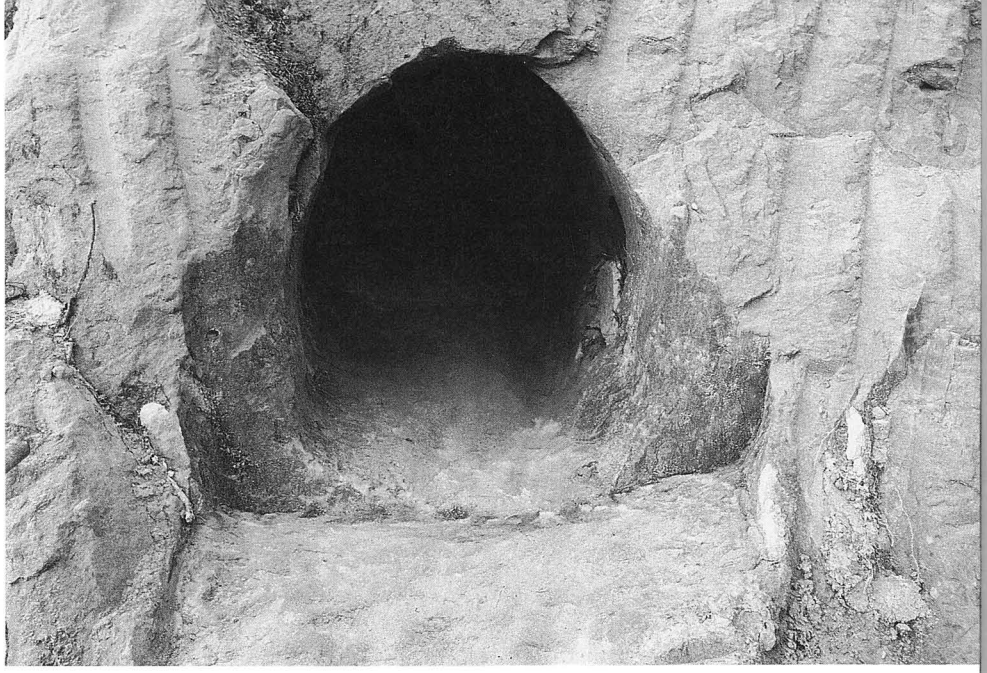
4 号穴と 5 号穴の位置関係

4 号穴調査前の状況
（東方より）



4 号穴羨門検出状況
（東方より）

図版 9



4 号穴羨門検出状況
閉塞石を除去したところ
（東方より）

4 号穴玄室内人骨出土状況

4 号穴玄室内人骨出土状況
頭骨と大褪骨

4 号穴右袖側屍床
（西方より）

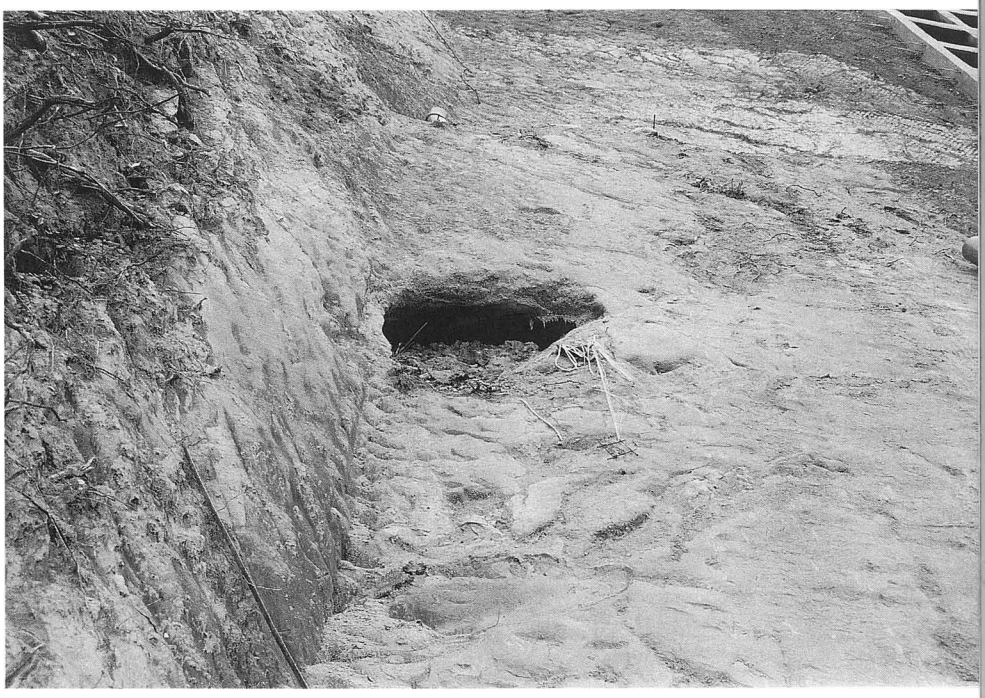
4 号穴左袖側屍床
（西方より）

4 号穴左袖側に造作された溝
（東方より）

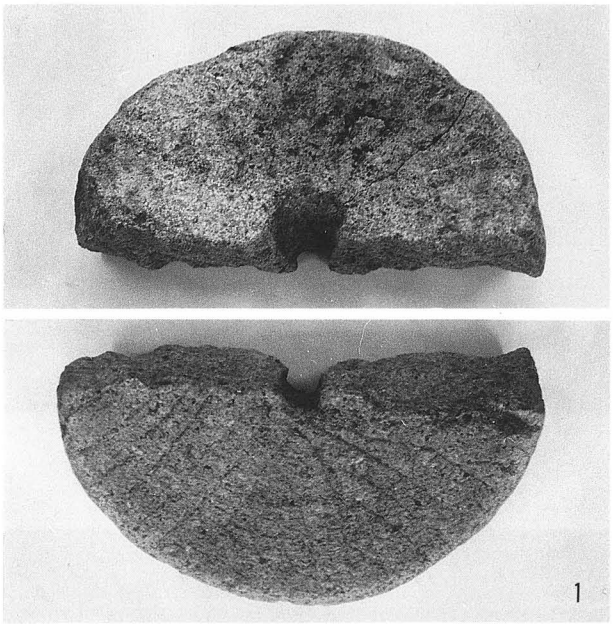
図版11

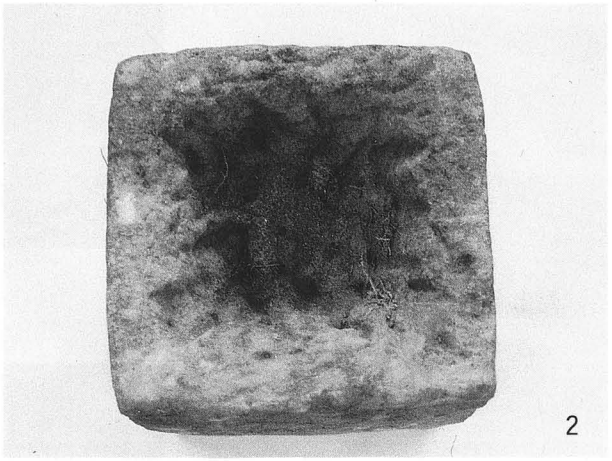
4 号穴羨道部工具痕
（西方より）

5 号穴調査前の状況
（東方より）

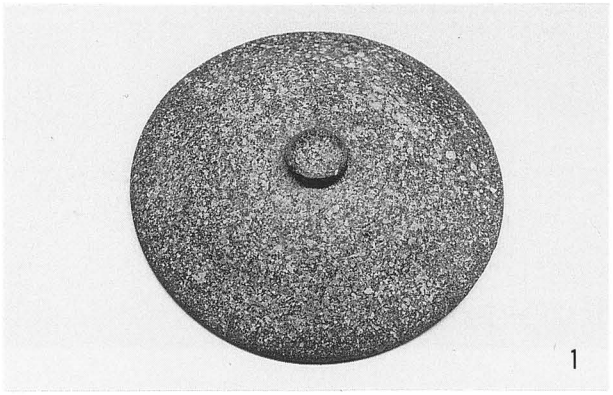


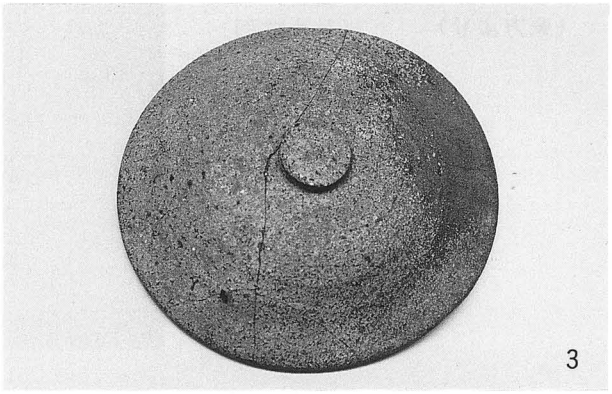
5 号穴完掘状況
（東方より）





1 号穴出土石製品（番号は第 5 図に対応）





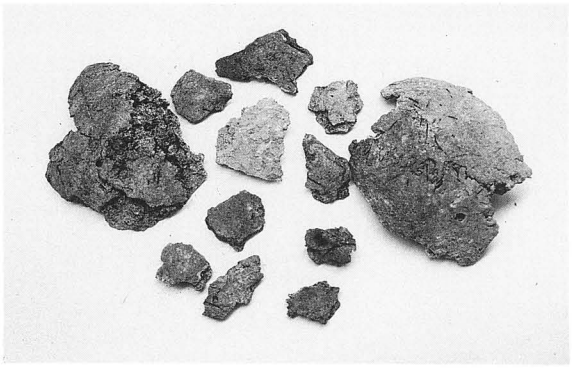
3 号穴出土須恵器（番号は第 9 図に対応）

図版13

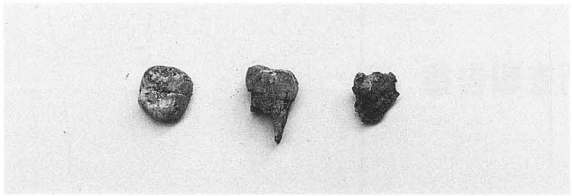
歯牙

部位不明骨

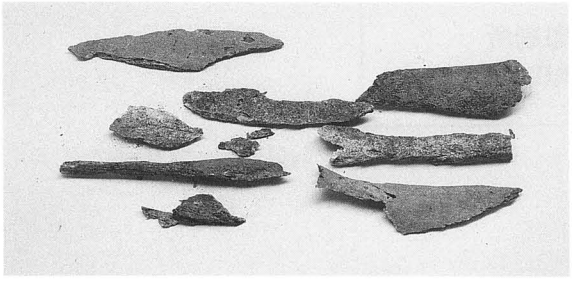
3号穴出土人骨



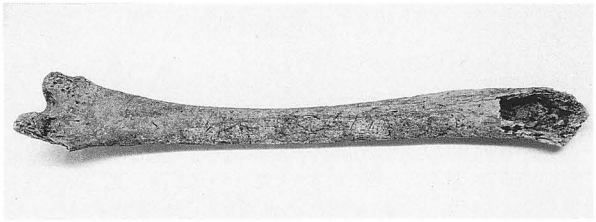
頭骨



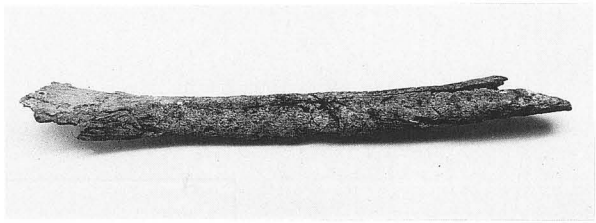
歯牙



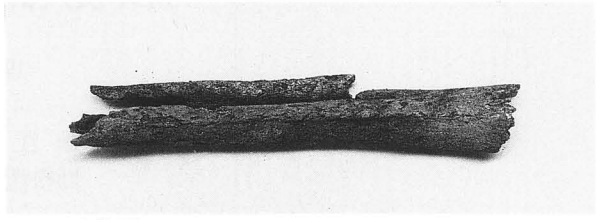
脛骨ほか



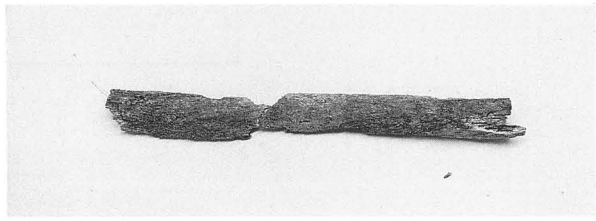
大腿骨



大腿骨



大腿骨



大腿骨

4号穴出土人骨

舟津横穴群発掘調査報告書

1995年3月

発　行　松江市教育委員会
㈶松江市教育文化振興事業団

印　刷　有限会社 高浜印刷所
松江市北堀町8